防災ボランティアスタッフが捉える被災地での子どもの状況

○遠藤 洋次（関西福祉大学）

Ⅰ. はじめに

大規模な自然災害による被災者の生活の状況を考えみると,特に小児の場合には,精神的な影響として，一時的な退行やフラッシュバック、泣かないなどの急性ストレス症状、PTSD（Post-Traumatic Stress Disorder :心的外傷後ストレス障害）などが起きる危険性がある。被災地での重要な支援として、阪神淡路大震災以降、多くの防災ボランティアが活動し，大きな役割を担っている（内閣府，2010）．被災地で防災ボランティアはどのように子どもの心理的ストレス症状等を察知し支援をしているのであろうか．防災ボランティアの語りから、被災地での子どもの状況を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

東日本大震災以降に発生した大規模災害の現場で、子どもを対象とした活動を行ったことのある防災ボランティア経験者を対象にインタビュー調査を実施した。インタビューの実施方法は、対象者と相談の上、対面または Web 会議システムを使用したオンライン面接とした。インタビューガイドを使用し、災害現場で経験した子どもの状況について尋ねた。インタビュー内容は許可を得て録音しデータとした。データ分析は、質的分析手法である SCAT(Step for Coding and Theorization)（大谷，2007）を用いた。本研究は関西福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

インタビューは 4 人の対象者に実施した。対象者の語りから、32 のテキストを抽出した。これらのテキストの内容の分析から、防災ボランティアは被災した子どもの状況について、子どもは被災経験によるトラウマと被災後の様々な変化により漠然としたストレスを抱えていることを捉えていた。また、避難生活などにより、遊ぶ機会や環境を喪失しているが、ボランティア活動で遊びを行うと想像以上に積極的に参加し、場合によっては子ども達だけでの遊びを通してストレス発散する様子を捉えていた。

Ⅳ. 結論

被災した子どもは災害時の経験によるトラウマと避難生活による漠然としたストレスなどの心理的影響を抱えているが、災害ボランティア活動を通して本人から把握することは困難である。しかし、遊びへの想像以上の積極性から、子どもストレス発散には遊びが効果的であり、今後は、被災後早期から、子どもが遊べる環境を確保することで、子ども達の被災による心理的影響を軽減できる可能性が示唆された。

Ⅴ. 文献

大谷尚（2007）.4 ステップコーディングによるシス的データ分析手法 SCAT の提案―着手しやすく小規模データにも適応可能な理論化の手続き―.名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）.第 54 巻 第 2 号，p.27-44.

内閣府（2010）.防災情報のページ　特集　防災ボランティア．平成 22 年広報誌「ぼうさい」．https://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h22/01/special_01.html（2022.10.8.）